

- 安来市の赤江・オーガニックファームは有機葉物野菜の周年出荷を行うが、**夏に向かう時期の価格低迷や葉物以外の需要への対応が課題**だった。
- 農業技術C技術普及部と東部農林振興C松江農業普及部安来支所が連携して**新規品目を提案。実証ほの活用等によりモロヘイヤほか4品目を試作**し、栽培状況・収量確認・経済性調査を行った。
- モロヘイヤは県外の実需者に出荷し、評価を得た**ため、継続して栽培を行うこととなった。3年度は4戸が栽培を行っており、**産地の新規品目としての広がりが期待できる**。

具体的な成果

普及指導員の活動

○モロヘイヤ

- ・経済性調査の結果、収量:975kg、所得:1,193千円(/10a)
- ・反省会では**モロヘイヤの収益性が認識され、次年度の作付けに繋がった**。

- 県大阪事務所や県庁販売物流担当課の協力を得ながら**実需者に要望調査**を行い、**葉物を補完する有望品目を選定**した。
- 生産者グループに**品目提案**を行い、作型、品種について検討した。

○スナップエンドウ

- ・うどんこ病発生による草勢低下、収量減
- ・耕種的防除+薬剤散布の必要性確認
- ・次年度の収量向上技術について提案し、現状の1.5倍の収量目標をたてた。
- (R2収量:700kg→目標収量:1,050kg/10a)

- モロヘイヤの**栽培実証ほを設置**
- 栽培講習と定期的な巡回を実施

- 栽培結果、経済性の確認**のうえ、新品目の導入について生産者グループと意見交換を実施し、**次年度の栽培継続意向を確認**した。



○サヤインゲン

- ・2品種を作付け、収量・品質を比較した。
- ・反省会では実需者からの要望により、出荷規格の見直し、作型の拡大による収量増加を目指すことにした。
- ・マルチ被覆、誘引実施等の技術活用を確認した。

○ニンジン

- ・概ね順調に生育し、**目標収量を達成(収量:3.7t/10a)**。
- ・在圃性調査を行い、次作の作付け体系を作成できた。



普及指導員だからできたこと

- 関係機関の協力を得て実需者のニーズを調査し、生産者グループの品目検討を促すことができた。

- 新しい品目の栽培にあたり、マルチ被覆・誘引・薬剤防除など、有機葉物野菜栽培ではほとんど行わない技術を提案し、品質・収量向上に向けて話し合うことができた。

市場ニーズに応じた有機野菜新品目の栽培支援

活動期間：令和2年度

1. 取組の背景

島根県安来市の赤江・オーガニックファームは、有機 JAS 認証を取得して葉物野菜を生産する 6 経営体（うち 1 経営体は取得準備中）からなる生産者グループで、ホウレンソウ・コマツナ・ミズナといった定番品目を中心に県内外にむけて周年出荷を行っています。しかし、夏場の出荷品目の減少による売上の低迷から、生産者は葉物以外の品目を含めた新品目を模索しています。

一方、島根県では市場ニーズに対応した有機農業を推進しており、マーケットインの考えに基づいた新品目導入を支援することとして、実証ほの設置や実需者とのマッチング支援を行っています。そこで今回、新品目としてモロヘイヤの実証ほを設置したほか、数品目を選定して試作を行い、課題を話しあうことで栽培拡大への可能性を検討しました。

2. 活動内容（詳細）

生産者グループの新品目選定の一助とするため、県大阪事務所や産地支援課販売物流 G の協力を得ながら、実需者から需要のある品目の聞き取りを行いました。この結果を参考に、東部農林振興センター松江農業普及部安来支所と連携し、モロヘイヤで栽培実証ほの設置、新規品目候補としてスナップエンドウ、サヤインゲン、ニンジン提案し、了承を得ていずれも試作に取り組むこととなりました。

また、有機農業では慣行栽培と比較して病虫害・雑草対策がより難しくなるため、栽培期間中は定期的に巡回を行いながら状況を確認し、栽培終了後は収量や栽培上の課題等を話し合いました。

(1) モロヘイヤの栽培支援

実需者から出荷要望のあった品目であり、県事業を活用してハウス 5 月播き作型の実証ほを設置しました。普及部は生育状況の確認、定期的な現地指導を行いました。

生育については発芽率が低いうえ生育初期のコオロギによる食害により、欠株率が高くなりましたが、補植やコオロギ対策として株元をキャップで守るなどの対策により成株率が向上しました。



写真1 モロヘイヤ栽培の様子

(2) スナップエンドウの栽培支援

実需者から出荷要望のあった品目であり、ハウス春播き作型で取り組みました。生育中期からうどんこ病が発生し、有機 JAS 対応薬剤による対応を指導しましたが、有機 JAS 申請上の都合もあり、今作では薬剤使用を見送りました。

(3) サヤインゲンの栽培支援

実需者から出荷要望のあった品目であり、ハウス抑制作型に取り組みました。播種期を8月下旬～10月上旬までの6回に分散し、栽培適期を探りました。初期の生育不足がみられたため、液肥による追肥を指導したほか、葉物栽培にはない倒伏防止の誘引の指導も行いました。



写真2 スナップエンドウ栽培の様子



写真3 サヤインゲン栽培の様子

(4) ニンジンの栽培支援

実需者への聞き取り調査では、ニンジンを通年的に安定取引が見込まれる品目だったため、有機栽培で作りやすい露地8月播き作型で取り組みました。

作付け前の土壌分析や土壌断面調査を実施し、施肥量や排水対策を講じた後の作付けとしました。



写真4 ニンジン栽培の様子

3. 具体的な成果（詳細）

(1) モロヘイヤ

経済性調査の結果、収量：975kg、所得：1,193千円（／10a）となりました。これらをもとに現地で反省会を開催し、モロヘイヤ収益性が認識され、次年度の作付け拡大に繋がりました。

(2) スナップエンドウ

経済性調査の結果、収量：700kg、所得：709千円（／10a）となりました。栽培終了後、次作に向けてうどんこ病対策（耕種的防除や有機JAS適合農薬散布）を提案し、1.5倍の収量目標を生産者とたてることができました。

(3) サヤインゲン

2品種で播種時期を変えて比較した結果、出荷時期により収量が変わることがわかりました。次年度は品種ごとに播種時期をずらすことと出荷規格の見直しにより、長期出荷の計画をたてました。

また、病害対策としてマルチ被覆、誘引の実施、株間の変更を行うことを確認しました。

(4) ニンジン

播種期の高温による発芽不良で、追い播きを実施した品種(4品種中1品種)もありましたが、概ね順調に生育し、積雪の影響もほとんど受けず目標収量を達成(収量:3.7t/10a)しました。また、在圃性調査も行い、次作の作付け体系を作成する一助となりました。

担当農家は次年度も意欲を持って作付けを計画され、将来的には50a規模まで拡大する計画を作成されるなど、ニンジンの作付け拡大につながる取組となりました。

4. 農家等からの評価・コメント

(安来市 赤江・オーガニックファーム K氏)

葉物野菜の周年生産では、夏場の出荷品目の減少が課題です。これを補う品目をグループの生産者それぞれが模索していたところ、数品目を普及部から提案してもらい、試作を行いました。モロヘイヤは実需者からの評価もあり、有望な品目として今年は4名が栽培を行っています。新たな品目の栽培でハウスの有効活用と売り上げ増につながるよう、引き続き関係機関の協力も得ながら模索をしていきます。

5. 普及指導員のコメント

(東部農林水産振興センター雲南農業部 主任農業普及員 木戸菜月

前農業技術センター技術普及部 主任農業普及員)

栽培経験のない品目の導入や、使用したことのない有機JAS適合農薬の使用を検討してもらうにあたり、生産者に対して具体的な数値等を提示することで、受け入れて実施してもらいました。今後は提案した新品目が定着し、さらなる安定生産に繋がるような活動をしていきたいです。

6. 現状・今後の展開等

令和3年度は昨年度の栽培結果をふまえ、新たにモロヘイヤの栽培実証ほを設置し、状況の確認を行っています。生産物は県外の実需者への販売が決まっており、一定の収量と実需者からの評価が得られれば定番品目への採用も期待されることから、関係機関と連携をとりながら支援を行っていく予定です。

また、その他の品目についても昨年度の課題解決に向けて指導及び情報提供を行い、有機葉物経営を補完する品目の増加につなげていきたいと考えます。